

# 無精な発想

太田次郎

ある工学者と対談したとき、「これからは発明発見の時代ではない。情報をいかに整理し、組み合わせ、体系化するかが、問題である。雑然とした情報から急に思いついたことは、大部分役に立たず、それよりもシステム化した情報からの発想の方がずっと有効である」といわれた。なるほど、知識をいかに整理するかを説いた本は、洛陽の紙価を高めている感じである。個々の情報をカードにして、そのカードを組み合わせる方法、ノートのまとめ方など、著者によりいろいろな方法があげられている。

大部分の読者は、著者のやり方に感心する。そして、その一部でも実行に移そうと努力するが、なかなか永續きしない。せっかく奮発して購入したカードや新式のノートも、日記帳と同じように、最初の何枚かで、あとは白紙の

まま、「やはり自分は、とても及ばない」とあきらめてしまふようである。

ビジネスの面でも、ファイルボックスのついたスチールの机、不用な書類を切りきざむ機械など、整理し易い多くの器具がとり入れられてはいても、それらが有効に活用されているよりも、机上に書類が山積している方が多い。明るい大きな窓、きちんと整理された書類、幾何学的に並んだ机という部屋は、何となく外国へいったような感じで落ち着かない、うすよごれたちょっと雑然とした室内の方が、安心である。必要な書類は、他人が見ると雑然としている山の中から、摩訶不可思議に、ひょいととり出す方が、人間的な感じがする。

日本人をけなすことの好きな識者は、「だから駄目なのだ」と慨嘆したり、「元来、日本人は曲線的な美しさを感じ、幾何学的な美しさを重んじる西欧人と違うことに、その原因を求め、果ては東洋と西洋の庭園の比較から、東西文明の対比にまで及ぶ」壮大な議論を展開したりする。

かくいう筆者も、どちらかといえば整理好きであるとうぬぼれている。新しい文具や器具に飛びついたり、一念発

起して書齋の大整理をしたりして、自己満足におちいる習性をもっている。ところが、いつも清潔さの満足感と、何となく落ち着かないようないらだちとに悩まされ、しばらくすると、雑然とした環境で暮すようになる。そして、また一念発起の繰り返しである。

ところで、冒頭の座談会が終つての帰途、反省感をいだきながら歩いている間に、困つたことに気がついた。自分が少しでも仕事が進んだと思つたり、たいした発想ではないにしても少しは新しい思いつきをしたりしたときをたどってみると、どうも雑然とした中にいたときの方がほとんどであつた感じがする。本や書類が散らばつた私のごくわずかの空間に原稿用紙をおいて、たどたどしく綴つた原稿の方が、きちんと整理したノートをもつたものよりも、後で読んでみると、まあましのことが多いようである。

自らの体験から一般論を述べるのは、どうもおおがましいので、このことは他人前には出さなかつたが、あるとき酔余の座興にこのことを話すと、まわりにいた多くの文筆を業とする人々が共感した。中には、いささか自嘲の気味を感じる発言もあつたが、要するにあまりきちんとしてい

は、発想が湧いてこないという点では一致してしまつた。

さらに議論は発展して、「やわらかい材料から成り、曲線に富む人間という生き物は、本質的に幾何学的な整理を好まない、それをやるのは、情報がふえ過ぎてしまつたからで、本来はもっと情報は少ない方が望ましい」という、下手をすれば文明の否定に通じかねない気炎をあげて散会した。

コンピュータ時代に背を向けて、実生活は文明の恩恵に浴しながら、仙人を気どるような恰好の良さに生きるつもりはないが、正確さに基準をおいた生活にやり切れなさを感じている人は少なくないであらう。

体系化した知識から次々と発想を生み出していくやり方は、能率的で、無駄が少ないであらうが、それで満足するのは一部の限られた人のようである。庶民は、整理コンプレックスを捨てて、無精といわれても、のんびりと愚にもつかぬ発想を楽しむ方が幸せである。そして、その中から確率は低いが、システムからは生まれぬ、明日への知恵が浮んでくるように思われる。

(お茶の水女子大学)